

もしれない。だが、そんな状態にあっても欲がわいてくるのが、人間というものだ。

娘の花嫁姿と、孫の顔が見たい。

「そいつはまあ、気の早い話だな」

笠野は肩をすくめる。仕事が恋人という娘の現状に不安があるのはよく分かるが、彼女はまだ若い。余計な口を挟まず、静かに見守るのがお互いのためではないか。

その忠告を永田は受け入れたが、沈黙と無関心は断じてイコールではなかった。ETUの会長が娘に近づく男に鋭く目を光らせているというのは、関東のサッカー関係者には有名な話である。

「お前が変な男に引っかかったら、会長だけじゃなく、

俺も泣いちゃまう」

付き合いが長いおかげか、有里はトップチームの選手たちと良好な関係を築いている。丹波の発言は冗談ではなく、有里の周りにはベテラン選手たちによる見えない壁が築かれていた。ETUの持ち味である家庭的な空気が、彼らの行動に影響を与えてるのは間違いないが、その気遣いをありがたく受けとるべきか、それとも拒むべきか、父親としては判断に迷うところだ。

娘には立場や収入の安定した、要するにサッカー選手とは真逆の仕事に就いた伴侶を得てもいいと永田は考えている。そんな彼にとっては喜ばしいことに、娘にはサッカー選手と結婚するという下心はなかつた。そし

て同時に、彼女は恋愛や結婚に対する幻想や夢も抱いていなかつた。クラブ主催のイベントから帰ってきた幼い娘の悟りでも開いたかのような表情と声を、彼は未だに覚えている。

「たつみに必要なお嫁さんっていうのは、きっとお母さんみたいな人なんだよ」

イベントの壇上で、選手は結婚や恋愛に関する質問を受けたのだろう。憧れの選手の答えに耳を傾け、考えを巡らせた結果、有里は自分にも理解できる母親という単語を導き出したのだ。栄養バランスの整った美味しい食事を用意し、汚れた服を洗い、清潔な寝床を整えてくれる女性。達海の要求に応えるには、当時の有里はまだ心身ともに幼すぎた。

「私は達海さんの召使いじゃないの！」

だが人生は予測がつかないものだ。成人した有里は、監督としてETUに戻ってきた達海の面倒を見ている。語学力のあるスタッフが、外国人選手やその家族の生活をサポートするのは珍しくはないが、監督がクラブハウスに住みこみ、スタッフに身の回りの世話を任せているなどという話は、永田も聞いたことがなかつた。

「また部屋散らかして。ゴミはゴミ箱に捨ててって、何回言えば分かるの!?」

良く言えばフットボール一筋、悪く言えばだらしのない達海の生活に有里は振り回され、事あるごとに怒りを